

第十一話

花宴事付伊予国脚力事

『前太平記』上 卷第二 三十九頁から四十一頁より

承平六年三月十日、紫宸殿で花の宴を準備されて、(歌の)腕前に優れている方々

才幹に堪えたる輩

をお呼びして、詩を作らせ、その文才を試される。参着したばかりの人々には、大納言実頼、中納言師輔、参議在衡、坂上経行、少納言友雄、大内記師任、文章得業生_(老)の淑方。その他菅江の両家、四道_(武)の儒者の後胤、南家北家の藤原一門、清中の両流、どの家も皆、司馬遷・司馬相如の筆力につりあい、文を作って、興を乱

何れも皆

司馬遷・相如が筆力に符ひ、

文を成して樂を乱さず、

さない。杜子美・李白の句法を身につけ、様式をつくろって、手本に調子が狂わ

杜子美・李白が句法を得、

象を仮つて

法を爽はず、

ず、人よりも優れた才賢で、それぞれさがしたりしらべたりして、韻を調整し、天

傑然たりし才賢。

各探つて

韻を勒め、

皇のお目にかかる準備をされる。見聞きしたことは、世の人々を驚かせた。そもそ

天覧に備へらる。

見聞耳目を驚かせり。

も、この花の宴と申し上げる行事は、中国の対策 (参) という登用試験の合格方法に

異朝の対策及第に准へて

なぞらえて、嵯峨天皇が弘仁三年二月神泉苑にお出かけになって、桜の木の下に文人をお呼びして、この者たちに命じて、詩を作らせその文才をお試しになる。これがこの宴の起こりである。そのころ賀茂大社の齋院宮の有智子内親王と申した方は、広く経伝史漢 (肆)に通じ、文章や詩を作ることは世間に他にない才能であると噂された。同じく弘仁十四年春の二月には、帝が齋院宮にお出かけしてこの宴を設けられる。お供の公卿はそれぞれ春日山荘の詩を作られたが、齋院宮有智子内親王は、「塘光行蒼」の文字を探ることができて、筆をしたたらせてお書きになる。そ

毫を漚でゝ書き給ふ。

の言葉にいうことには、

ひっそりと静かな、幽荘のある樹木の中に迷い込む。

仙人（天子？）の車からひとたび降りると、ひとたび池となり、

林に住む一匹の鳥は、春の沢のある場を本能から区別し、

ひそかに流れる谷川の寒々とした景色の中にさす日光を眺める。

泉の水の流れる音が、程近くから聞こえて、新たに地を震わすような雷が響き、

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にしていただいて結構です。※※※

山の様子は高く明らかな中で、旧友は旅たっていく。

彼よりさらに交流の深い者を知っている。

生涯は、どうしたら地上を覆う青空に、返事をする事が出来るのだろうか。

〈原文〉

寂々幽荘迷樹裏 仙輿一降一地塘
棲林孤鳥識春沢 隱澗寒光見日光
泉声近報新雷響 山色高明旧雨行
従此更知恩顧渥 生涯何以答穹蒼

〈書き下し〉

寂々たる幽荘樹裏に迷ふ 仙輿一降る一地塘
棲林の孤鳥春沢を識り 隱澗の寒光日光を見る
泉声近く報じて新雷響き 山色高く明らかにして旧雨行く
此れより更に恩顧渥きを知る 生涯何を以つて穹蒼に答へん

と、少しもお考えになっている様子もなく、言葉は控えめで、情趣は丁寧に（描

少しも案じ給へる気色も無くて、 辞約やかにして、 情濃やかに

写され）、四韻は揃っている、七言律をお作りあそばされたので、帝はこのうえな

四韻均しく、 七言律を作らせ給ひければ、 帝限り無く

くご感心しお褒めになって、すぐに三品を授け、百戸の地を与えお治めになった。

歡感あつて、 則ち三品を授け、 百戸の地を封ぜらる。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にしていただいて結構です。※※※

この時、お年は十七歳におなりになった。その後代々の天皇は恒例として毎年執り行いなさり、今この御代に至るまで、たいそう面白がりなさっていたのだった。

こうして一日中詩歌の遊宴も決着がつき、それぞれ褒美を頂戴すること、位によ

各禄を賜ること

位に依って

って差があり、もう帰ろうとしなさったところに、「伊予国からの伝令である」と

其差有り、

已に退去せんとし給ひし処に、

「伊予国よりの脚力なり」とて

言って、（使いが）到着する。その状況を語ることには、「当国の住人である伊予

到着す。

掾の藤原純友が山陽・南海・西海の海賊を誘い込み、千艘余りの舟を調べあげ、津々浦々にて悪事を働く。これのために海上を行く船はすでになくなる。ところ

海上往来既に絶ふ。

が、当国の目代及び阿波讃岐の武士を求め、先月の二十八日にはこの者たちを制圧して賊徒の首領の二十六人を討ち取るといっても、あの徒党はその軍勢は一万人に及ぶ大勢であるので、依然として落ち着かずとうとう戦乱に発展する。もし討伐

（の機会）を延ばすならば、随分と討伐は難儀なものとなりましょうか。早く国司

若し追討延引せば、

頗る難儀に及び候はんか。

が下向して、追討するべきでございます」と、詳しいことを書によって報告する。摂政忠平公が仰ったことは、「過ぎ去った承平三年、賊の群れが都のうちを脅して、財物を奪ったが、検非違使の役所に命じてこれを捕えさせる。また、去年は山陽道に海賊蜂起の次第を訴えている間に、宮兵によって、之を制圧する。きっと彼の者たちが残党であろう。急いで守護する者を派遣し、こいつらを制圧させるのがよい」と言って、京にいる武士をお選びになる。中でも式部少輔紀淑人は武勇の才能が、世間が公認するところであるので、すぐに伊予守に任命し、日も経たずに下向して乱を抑え、罰を与えよという命令をお下しになられる。淑人は誉を広めて、

淑人眉目施して

御前をご退去なされたのだった。

御前を退去せられけり。

注釈

※壺・文章得業生……大学寮で紀伝を学んだ学生の中から、二名選抜されて、給費生として、七年勉学の後、大学から推薦された学生に式部省が課した方略策の論文試験に応ずる者。

※式・四道……紀伝・明経・明法・算道。

※参・対策……令制での官人登用方法の一つ。問題博士が策問を出し、漢文の答案を書かせる。

※肆・経伝史漢……聖人の書、賢人の書、史書、漢書。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2015/5/30

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

